無職なヴァンパイア

「腹へった……」
ここ一週間何も食べてない。食べるというより、飲むというべきか。俺の食糧は人間の血なのだから。
そして俺は今、職探しのためハローワークをまわっている。金がなくて住む家すらないからだ。
「……こんなことになったのは、全部あいつらのせいだ！」

元々俺は児童保護施設にいた。……と言ってもそれは表向きの話で、実はそこに住んでいるのは吸血鬼の子供だけである。そこは人間社会で生きづらい、貴重な吸血鬼の子供を保護する施設だった。
あそこにいた頃は幸せだった。できればずっといたかった。しかし、１８歳になると泣く泣く出て行かなくてはならない決まりになっていた。１８の春、俺は施設を出て無事就職した………はずだったのだが。
施設を出て、俺はアパートで一人暮らしを始めた。ボロいし狭いところだったが、ないよりはましだった。それから二日ぐらい経つと、腹が減ってきた。そこである疑問が出てきた。
「そういや食糧って、どうやって手に入れるんだっけ？」
施設にいたころは、食糧は勝手に用意されていた。近くのスーパーに売ってる気配はない。ということは………狩るのか。
そんなわけで、俺はさっそく人間の血を吸いに街に出た。と言っても殺すわけじゃないのでとても良心的だ。しかし……。血を吸おうとすると人間共はやたら大声で逃げ回りだした。挙句の果てには手に輪っかをはめられて、白黒の車に無理やり押し込まれた。
結局俺は、「ショウガイザイ」というものになったらしい。法律の一種らしいが、意味はよくわからなかった。
翌日会社に行くと、「クビだ」と言われた。まったく意味が分からなかったが、「ショウガイザイ」が関係しているらしい。
……そして今に至る。

例の一件で、人間の血を吸うといろいろめんどくさい事になることを知った俺は、人間の血を飲むことをあきらめた。その後どうしていたかというと、俺が住んでいる公園にいる野良猫の血を吸って、なんとか食いつないでいた。人間の血と比べると、まずいし栄養もないが、やむをえなかった。しかしその野良猫も、最近は公園に寄り付かなくなって、一週間も姿を見ていない……。

「このままだと飢え死にしちまう。どうしたらいいんだ……。」

どこか猫がたくさんいる公園でも探すか……。いや、猫でなくてもいい。とにかく、動物がたくさんいる場所………。ん？　動物がたくさんいる場所？

「そうか！　動物園に行けばいいんだ！」

次の日、早速俺は動物園に行った。やっと飯が食える！　……と思ったのだが、オリへの入り方がわからない。中に人間がいるので、入れるはずなのだが……。近くに人間の家族がいたので、「これ、どうやって入るんですか?」と聞いてみると、小さい人間に「おじちゃん、ここはライオンさんのお世話してる人しか入れないんだよ?」と言われた。おじちゃんとは失礼な。まだ１９歳だぞ、クソ餓鬼。

「ライオンさんのお世話してる人」というのは、ここの従業員のことだろう。ここで働けば、金も飯も手に入って、一石二鳥じゃないか。俺は早速園長のところに行った。

「ウチでは雇えないねえ」

「そこをなんとか！　どんな動物でもがんばりますから！」

「そう言われてもねえ……」

園長が話すには、人手はもう十分足りているらしい。しかし、近くに動物園はここしかない。こっちは一文無しなんだ。ここで雇ってもらえないと困る。

「あっ……。そういえば…………」園長が何か言いだした。

「一頭だけ……、でも、あれは……………」

「なんでもしますから!そいつの世話をさせてください！」

園長に例の動物のところまで案内してもらう。いったいどんな動物なんだ……。ちょっと帰りたくなってきた。

「…………ここだよ」

そこにいたのはごく普通のゴリラだった。
なんだ、ただのゴリラじゃないか。いや、それどころかゴリラって人に近いんじゃないのか？　これは久々にうまい血が飲めるかもしれない！　俺は早速、ゴリラの血を飲もうとゴリラに噛みついた。
「いってぇなあ！」
……………………えっ？

「園長、何か言いましたか？」
「…………しゃべるんだよ、そのゴリラ」
うん、なんか聞こえたけど。嘘だろ？　実は、園長なんだろ？　嘘だと言え。
「最初はね、普通だったんだけど。いや、そうでもなかったか。まあ、とにかく、ここに来てから三日くらいだったかなあ、急にしゃべりだしたんだよ。しかも、それが毒舌でねえ。こいつの飼育員、一週間でもう二人もやめちゃったんだ。ノイローゼで。そんで、もう誰も世話できそうにないから、保健所にでも送ろうかと思ってたんだけど……。君を見て気が変わったよ。すごいねえ！　あれ、新しいコミュニケーションだろ？　君ならいける気がする、頑張ってくれ！」
何を言っているのか全然分からない。特に最後のほうが。まあ、なにはともあれ園長は俺のことを気に入ったらしい。俺の価値が分かるマシな人間もいたということか。よし、これで毎日うまい血が飲めるぞ！

一週間がたった。あれから血は飲めていない。本当に死にそうだ。
予想以上に抵抗してくる、このゴリラ。寝込みを襲ってもみたけどだめだった。しかも、いちいち怖いことを言ってくる。
どうやら力ずくで血を吸うのはムリらしい。このゴリラと仲良くなって、吸わせてもらうほかなさそうだ。でも、ゴリラの機嫌ってどうやって取るんだ？　やっぱりバナナか？
……あっ、そういえば、こいつ名前がなかったな。名前でも付けたら喜ぶか。ゴリラだし。
「おい、お前に名前をつけてやるよ！」
こっちを向きもしない。いつからこんな子になったんだ。……そういえば、何て名前にしよう？　全然考えてなかった。
「えーと……。じゃあ………………坂口。今日からお前は坂口だ！」
ゴリラ……もとい、坂口がこっちを向いた。かなり思いつきで付けた名前だが、気に入ったらしい。さすがゴリラだ。

「どうだ！　いい名前だろう？」
「…………殺すぞ」

「人間ってマジウザいよな」
あれから五日が経った。坂口は少し話してくれるようになった。でも血は飲ませてくれない。意味が分からない。
ちなみに俺たちは専ら人間の愚かさについて話している。というか、これしか話が合わない。
「ほんとだよ！　全然血も吸わせないし。　貴重な吸血鬼様を何だと思ってるんだ！」
「いや、お前のほうがウザいけどな」
「えっ…………？」
そうこうしゃべっているうちに、開園の時間になった。そういえば最近、気に食わないことがある。坂口が人間共の間で人気が出てきたことだ。
俺が坂口の世話をするようになって、坂口は表に出られるようになった。しゃべるゴリラが珍しいからか、人間共はすぐに興味を持って、瞬く間に人気が出た。
「全く人間って奴は、最初は気味悪がってたくせに、急に手のひら返しやがって。この人気だって今だけで、すぐに違うやつに移るんだからな。」と坂口は言うが…………実際人気ありありじゃないか、腹立つ。血も吸わせてくれないし……！
その日の夜、とうとう我慢の限界を超えた俺は、家出をすることにした。まあまあ住み心地のよかった動物園を後に、とりあえず前いた公園にもどることにした。

公園は封鎖されていた。貼り紙があり、たちの悪いホームレスがいたから、戻ってこれないようにしたと書いてあった。俺がいた頃は、他に寝泊まりしてるやつはいなかったから、俺がいない間に何かあったのだろう。なんてことをしてくれたんだ。
行く当てがない俺は、しぶしぶ動物園に戻ることにした。……その時。
「おい」
振り返ると、そこにはゴリラがいた。なぜ街中にゴリラが……。
…………あっ、そういえば、戸締り忘れてた。ということは、これは坂口か。
「……何してんの、お前？」
「お前に言われたくねえけどな。脱走してきたんだよ。オリ、開いてたし。人間から逃げるいい機会だと思ってな」
なんだ、俺を追いかけてきたわけじゃなかったのか……。

「てゆうか、なんで逃げる必要があるんだよ。お前、人間共に人気だったじゃないか。」
真っ暗でほとんど何も見えないのに、睨まれているのがわかった。凄い殺気だ。……話を変えよう。
「じゃあ、一緒に行くか！」
「…………どこに行くんだよ？」
「そうだな……。お前の生まれ故郷とか？　動物多そうだし！」
「お前に血を吸われるような、どんくせえ奴なんていないけどな。いいよ。どこにあんのかは知らねえけど、『アフリカ』ってとこらしいぜ。そこで、黒い人間たちに捕まえられたんだ……。ちなみにこっちに来たとき、その黒い人間たちが使ってた言葉でしゃべったら、通じなかったたな」
「俺も、それが何処にあるのか分からないけど、いつか着くだろ。行こう、アフリカへ！」
夜明けとともに、俺たちは歩き始めた。